

令和3年度 第3回地方独立行政法人京都市産業技術研究所

評価委員会 会議録

日時：令和4年1月26日（水）午後3時30分～午後4時55分

場所：京都市産業技術研究所 2階 ホールA・B

議題：（1）中期計画の位置づけ等について

（2）第3期中期計画（案）について

（3）今後のスケジュールについて

議事要旨：

【1 開会】

- ・北村 京都市産業・文化融合戦略監からの挨拶等

【2 議題】

（1）中期計画の位置づけ等について

～事務局から資料1に基づき説明～

（2）第3期中期計画（案）について

～京都市産業技術研究所から資料2・資料3に基づき、第3期中期計画（案）について説明～

・以下、各委員の質問・意見など（○：委員、●：京都市、◎：産業技術研究所と表記）

○： 第3期中期計画（案）について、御意見・御質問はあるか。

○： 資料2の5ページ「中小企業が導入困難な設備機器を整備し」という記載について、ハードウェアのみに焦点が当たっている印象である。ソフトウェアやミドルウェアなどは導入されるのか。時代に応じて様々なニーズが企業から出てくるので、そういう面の取組も検討いただきたい。

◎： 資料2の5ページの取組例にもあるように、企業のオーダーに基づき試験・分析を行い、その結果をお返しするだけではなく、その結果から、企業が抱える課題に対して解決法を提示するなど、引き続き支援を行ってい

きたいと考えている。

また、6ページの「ものづくりの担い手育成」でも記載しているように、企業からの要望に応じてカリキュラムを組むORT事業を通じて、企業の人才培养に資する取組を行うなど、ソフト面の取組についても、企業が利用しやすいような形で検討を進めているところである。

- ： 今の時代に即した支援を是非充実させていただきたい。
- ： 京都市産業技術研究所（以下、「産技研」という。）以外に、京都高度技術研究所（A S T E M）においてもソフトウェアの開発を行っている。どの機関が最適な窓口になるかという点についても、第3期の中で検討していく。
委員御指摘のとおり、ソフト面の支援は非常に重要であるため、しっかりと取り組んでまいりたい。
- ： プログラムという意味のソフトウェアではないが、現在、化粧ブラシの触感の特別な測定方法を開発しており、日本規格協会から標準化の話もいただいている。ニッチな取組にも企業のニーズに沿って支援していくという観点から、こうした支援等も行ってまいりたい。
- ： 第3期中期目標を一読した。産技研は色んな分野で頑張っていただいていると思うが、他には負けない産技研の強みとは何だとお考えか。
- ： 全ての分野で「これ」とは言えないが、例えば「試験・分析」においてはオーダーメイド型の試験、「ものづくりの担い手育成」においてはORT事業、「研究開発」においては課題オリエンテッドの研究開発（社会課題を見出し、これを解決するための研究開発）を進めるなど、第3期はこれらが強みとなるよう、取り組んでまいりたい。
第2期では、新型コロナの影響もあり、産技研の活動がやや内向きになっていた部分もあったが、第3期においては、ウィズコロナ・ポストコロナを見据え、積極的に外部とも連携し、外向きに活動を展開してまいりたい。
- ： 「見える化」は良いことだが、単なるパフォーマンスでは信頼を失いかねない。地道な研究開発によりしっかりと土台を作ったうえで取り組んでほしい。
私も、ものづくり協力会の世話役として責任を担っているという気持ち

でいる。研究会の会員減少の話もあったが、私どもも産技研のPRをしっかりと行ってまいりたい。

◎： 皆さまから紹介いただくことに加え、知恵産業融合センターにおいても積極的に企業訪問を行い、新たな顧客を獲得してまいりたい。引き続き、御協力をよろしくお願ひする。

○： 第3期中期計画（案）については、大変具体的に、前向きに書かれていると思う。

その中でも、良いなと思った点は、資料2の10ページの「リブランディングプロジェクトチーム」である。これから情報発信を行ううえで、若い感覚や発想が大事だと思う。そういう所に新たな顧客が付いてくるのだと思う。辞令交付式の写真も載っているが、このメンバーはどういう基準で選ばれたのか。また、どういう思いを持って取り組んでおられるのか、お聞きしたい。

また、産技研のホームページも良く見ているが、現在のリニューアルの状況をお聞きしたい。

◎： 「リブランディングプロジェクトチーム」のメンバーの選定については、本人の意欲を考慮し、所属長からの推薦をもとに、中堅・若手の職員を中心に十数名で構成している。現在は、定款に書かれている産技研のビジョンとミッションについて、改めて読み解いているところである。それに基づき、次のステップとして、時代に合った形で、何をどんな風にサービスを提供していくかを検討している。また、ホームページのリニューアルや情報発信の方法といった「見える化」についても議論を行っているところである。

ホームページは順次更新をしているところであり、大変見やすくなっているので、是非御覧いただきたい。

○： 産技研のホームページは上品だといつも感じているが、敢えて申し上げると、ワクワク感が少ないと感じる。ホームページは沢山の人が見るため、正確さはもちろん必要であるが、その中にも飛びつきくなるような内容があれば、新たな顧客獲得にも繋がるのではないかと思う。

もう1点、自己収入についてであるが、京都市以外からの収入を確保することについては大変素晴らしいと思う。寄付金等収入については、800万円の予算（令和4年度～7年度）を計画されているが、産技研は地方独立

行政法人であるので、寄付の優遇制度がある。ホームページにも寄付について記載されているが、もっと目に飛び込むかたちでアピールしていただきても良いと思う。コロナ禍にあって、寄付をしたいという人や何か社会の役に立ちたいと思っている人は、個人でも会社でも沢山いるので、自己収入に繋げていただきたい。

◎： 御指摘のとおり、ホームページについては多くの方に関心を持ってもらえるよう、どのように内容を充実させれば良いかという点について、リブランディングプロジェクトチームを中心に検討している。例えば、子供向けのコーナーや研究開発のこぼれ話など、対象に応じた内容とし、SNSも活用しながら、親しみやすい広報活動を行ってまいりたい。

寄付については、委員御指摘のとおり、産技研は特定公益増進法人であるため、税制上の優遇措置がある。その点をしっかりとアピールし、寄付収入の拡大を図ってまいりたい。

○： これまでの産技研の取組によって、現場ではどのような成果が生まれたのか。また、どのような反応があったのか。

さらに、今後第3期中期計画を進めていけば、現場ではどのような成果が生まれていくとお考えか。

◎： 「見える化」の話にも通じるが、産技研の支援により、どのような結果を生み出したかについては、市民にもしっかりと分かっていただくことが重要だと考えている。第2回評価委員会でも紹介したような「生産性が向上した」「不良品を改修できた」等の支援の成果や企業の声を、これまで十分に発信が出来ていなかったので、しっかりと声を聞き取り、様々な媒体を用いて発信していきたい。

○： どのような計画を立てて、実行し、結果どうなったのかということについて、評価委員会の中でもしっかりと議論してほしい。

また、産技研の支援を受けた結果について、企業側からフィードバックをきちんと受けることが重要である。

◎： 支援企業に対するフォローアップの強化については、改めて注力し始めたところである。

また、毎年顧客満足度調査を実施しているが、今後、より利用者のニーズや声を拾い上げられるような内容に見直してまいりたい。

- ：先ほど「見える化」の話をしたが、評価委員会では「検証」を行うことが大切。利用者からの辛口のコメントについても、該当の部署のみならず、産技研全体で情報共有することも必要だと思う。
- 最近、色んな会議に出席するが、P D C Aサイクルの最後の「評価・検証」の部分が特に強く求められていると感じる。
- ：委員御指摘のとおり、利用者からいただく厳しい声は、業務改善に向けた貴重な宝の山だと思っている。
- 第3期中期計画は4年間の計画ということで抽象的な記載も多いが、今後、利用者の声を反映させながら年度ごとの計画を作成し、評価委員会において評価していただくことで、P D C Aのサイクルをしっかりと回していきたい。
- ：技術相談や試験・分析を行ううえで、利用企業のニーズと産技研で応えられるラインナップが次第にずれていく可能性もある。1～2年ではそれほど問題にはならないかもしれないが、中期計画の4年のスパンになると、何となくずれてくる。それを確実にキャッチする仕組みづくりが重要だと思う。
- ：委員御指摘のとおり、企業が抱える課題をいかにいち早くキャッチし、解決策を提示するかが大切だと考えている。ただ、産技研は技術面の支援が中心となるため、産技研が単独で解決することは難しい場合も想定される。ウイングを広げて他の産業支援機関等と連携し、様々なネットワークで、技術支援に加え、金融支援や経営支援をセットで提供することにより、課題解決や成長支援に繋げていきたい。
- ：最近、大学においても社会課題解決のための研究開発にも取り組んでいるが、中々難しいというのが本音。産技研においては、地域企業の課題解決が日々の業務になっていると思うが、るべき社会像・将来像やそれにリンクした社会課題となると、具体性に欠けるため、仕掛けを作つておく必要があると思う。これから年度計画に落とし込まれるのだと思うが、どのようにお考えか。
- ：現在、構想段階ではあるが、社会課題解決に向けて、企業の取組をしっかりと見て企業ニーズを把握したうえで、産技研の持っている技術シーズをどう掛け合わせて期待に応えていくか。単独のチームでは限界もあるた

め、チーム横断の研究体制を敷くなど、多様な方法で課題解決に繋げていきたい。

また、産技研だけでは難しい局面もあるため、企業はもちろん、大学や経済団体、産業支援機関等とも連携し、総がかりで取り組んでまいりたい。

○： 産技研は、産業技術を通じて地域企業を支援するというミッションを背負っておられるので、研究開発はエンジンみたいな部分である。京都市の財政が厳しい中で、頑張っていただいているのは大変有り難いことである。今後ともよろしくお願ひする。

○： それでは、一通り意見も出たので、本委員会として確認を行う。

第3期中期計画（案）について、評価委員会としては、適当なものであるとすることに異議はないか。

全委員：異議なし。

○： それでは、本日の中期計画（案）を最終案とする。

（3）今後のスケジュールについて

～事務局から資料1に基づき説明～

【3 閉会】

・西本 京都市産業技術研究所理事長からの挨拶等